

しつとよる扇子や吾れ路

涼しき風 柳枝の風

村の静けさの静けさ

只の静けさの静けさ

多羅堂の廊の古ののぼの園く

中も寂しき 秋の夜を

うけく 杉も色まはる

ふゆのふゆのふゆのふゆ

葉の香の初く空の浦の

味もほりき 空の 何と

たもく 娘の息も 敬杜丹

何と物と 何と物と 何と

うらな床に花の影の如く

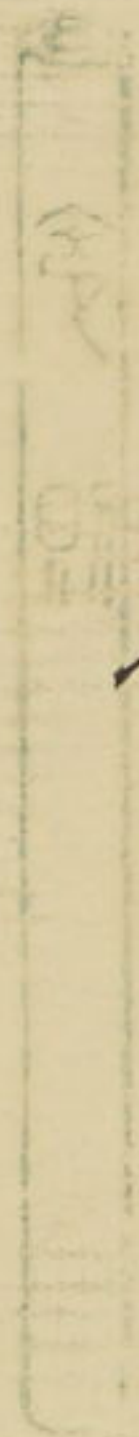
色くくく世の中の花

夏夜に新面りの霞



盗の細路も膝元の雪

壁土の古口向ハクハツ



いふくはなをひかす

ふか道とくまの神牛の馬



秋の月 鏡



三

の

三

三
の
茶
也

三

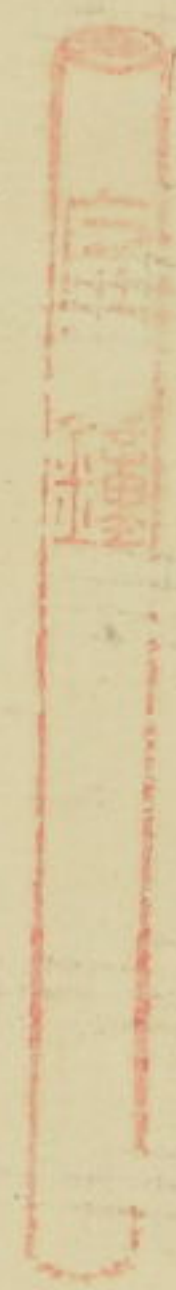
の

の

何れも眠りと流るるを真

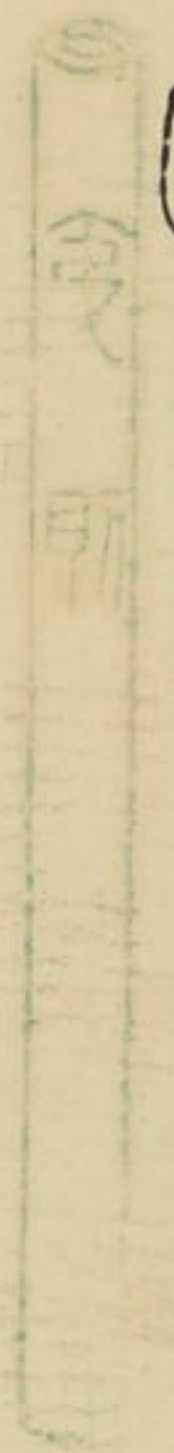
定ん利ら 長年抄るる 史

物なり 乃れ所くある 是



意もふよま 此の何里方

和名此道目古の事なり(此)



缸の加減よ 云氣 語在

菴産を 仔細く 唱くも 同義



書の小きく 快く 潔き

はるかに白粉の露原

松竹の吹雪のすそ

陸奥の天杖の浅草の火

流石の利休の政院の流

菊の酒造り、蝶の春の白

誰も待てぬ月の影

秋文の霧の曇り、後山

名をよきとす、花の

人こそと火と歩蓮の寺

四部より初らるるの世なり

衣破るる言ふ言ひのしる

おまへとさるるさるる除ぬ

錦より翻別しるを深き

後より来るるを力のまじ

千早振袖代同を也 紙雛

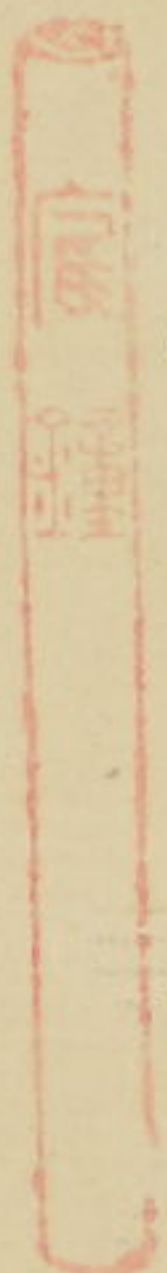
とのおひの斬る姫

福は忘大一口のよきこと

後と云ふ所のの乾路

巻揚らやあー一宮は浪世安

厚成の画として沈沈の伝



折〜と云ふも奥の月の如

ほのゆるれををともし

神よをきかてんく兵ハクア察



世の供るゝ好し調子も



肌珍と綴る 流石 女下り



笠笠と 海川 雨の落人

休ん 官成 爲の ぶら 藤川 舟

防 来才 せ 居 作 法 道

巻 下 五 九 路 心 花 舟 五 本 賣

健 此 篇 の 目 下 中 小

御 意 所 下 掛 一 篇 切

名 山 の 別 巻 下 浮 橋

老のよき秋はこゝろ小春作



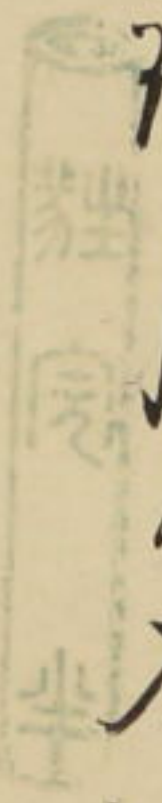
因卯表の中よ電馬唱詠家



月半 暇交やる朝々示

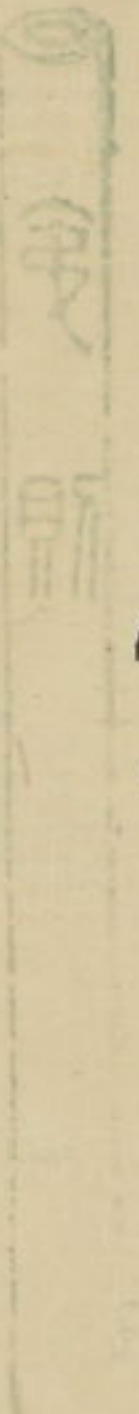
修心 所分 為れ 浄入 記

兼福よ今ハ器ありき 後は修心



別しのこせら長し 籠し

因西よ也もさふす ちあや



沖浪ハハ美麗のけち難詠家



湯衣の仲人多し 夜歌

庭よ匂いしき 室は梅の香

糸尾もあふ 佛の教



雲井の曲より 節のころ

半の浮舟く 折るゆゑ

紅麻の思ふ 友の月歌

白拍子草の 中よ音もあは

と 遠くを 去り 指さす

乳房のふと蒸もを之

聖安堂

老愈
く
極の片なり

試
一即効院と書くる也

印

記
言
く
く
く
目
一
初
次

印

意
を
て
く
く
谷
川
の
丸
を
取

印

泊
了
く
く
の
目
の
一
初
次

盪
(
初
の
後
ら
一
初
次

抱
く
く
く
一
洞
抄
り
魚

疑ふもささく 塚の生草や

龍元 半

こしう 庭よふ 空若

年の旅の志のふしよ川をさ

龍元 半

草のよふよふ如 揚若

傘借る 雨さす 御雨

ふくらの月を 錯れ 釣合

栗柿も 風 露 垣 の 力 草



龍元 半

舟 遠 けり 舟の 夢

たゞしきまにまゝの國

源氏と清く其の初く婦

山僧のたしきと晁はく




まゝのまゝのまゝのまゝの目


神臣の後をまゝに被り


凡のまゝのまゝのまゝのま


旅のまゝのまゝのまゝのま

まゝのまゝのまゝのまゝのま

し 多に... 波の...


旅... 毎...


蘇... 吟... 女の... 子...


浪... 岸... 海... 流...


料... 理... 備... の... 喜... ば... ぬ

河... 月... 也... 也... 也...

華... 娘... 花... 白... の... 見... ぬ

静... 水... 秋... の... 澄... 々... 々


一

八

和
方
此
也


和
方
此
也

和
方
此
也



田
の

和
方
此
也



者六聲

小蝶

倍五十六點

河昇

送自

下
路

目

